

# 令和6年 春季俳句講座

「第一句集を読む―師系を超えて(7)」

★第4回 仁平 勝 『鳥子』 攝津 幸彦

「俳句的というパラダイムを離れて」

攝津幸彦の俳句が「難解」といわれるのは、それが一般に「俳句的」といわれるパラダイムから逸脱しているからだ。とすれば「難解」な作品を読むには、まず、そうしたパラダイムを離れる必要がある。

動画配信日時 5月7日(火)10時より

## 仁平 勝(にひら・まさる)

一九四九年生れ。一九八〇年に自己流で俳句をつくり、第一句集『花盗人』(私家版)を上梓。「豈」「未定」「俳句評論」(準同人)「船団」「件」「魚座」(今井杏太郎に師事)を経て、現在「トイ」に所属。『花盗人』以後の著書は左記の通り。

- 一九八六年 『詩的ナシヨナリズム』(富岡書房)
- 一九八九年 『虚子の近代』(弘栄堂書店)
- 『江川卓の抵抗と挑戦―正義に克つ』(北宋社)
- 一九九一年 『秋の暮』(沖積舎)
- 一九九三年 句集『東京物語』(弘栄堂書店)
- 一九九六年 『俳句が文学になるとき』(五柳書院) \*サントリー学芸賞
- 二〇〇〇年 『俳句をつくろう』(講談社)
- 二〇〇二年 『俳句のモダン』(五柳書院) \*山本健吉文学賞
- 『日本の四季句の一句』(講談社)坪内稔典、細谷亮太との共著
- 二〇〇三年 『加藤郁平論』(沖積舎)
- 二〇〇四年 アンソロジー『セレクション俳人18 仁平勝集』(邑書林)
- 二〇〇六年 『俳句の射程』(富士見書房) \*加藤郁平賞、俳人協会評論賞
- 二〇一〇年 『虚子の読み方』(沖積舎)
- 句集『黄金の街』(ふらんす堂)
- 二〇一四年 アンソロジー『仁平勝句集』(ふらんす堂)
- 二〇一八年 『シリーズ自句自解Ⅱベスト一〇〇 仁平勝』(ふらんす堂)
- 二〇二二年 『永田耕衣の百句』(ふらんす堂)
- 二〇二三年 句集『デルポーの人』(ふらんす堂)

## 攝津幸彦『鳥子』

■ 攝津幸彦（一九四七年～九六年）、『鳥子』上梓までの俳歴

関西学院大学在学中、母（摂津よし子）が所属していた「青玄」（伊丹三樹彦主宰）の縁で伊丹啓子から誘いを受け、「関学俳句会」の創立に参加。「青玄」の句会および全国学生俳句連盟で知り合った坪内捻典、澤好摩らと同人誌「日時計」を創刊（一九六九年）。大学卒業後、澤好摩に促されて「俳句研究」の五十句競作（高柳重信選）に応募し、第一回から第三回まで連続して佳作第一席となる（一九七三年～七五年）。「日時計」終刊後、坪内らと同人誌「黄金海岸」を創刊（一九七四年）。

■ 『鳥子』（一九七六年、ぬ書房）の概要

著者二十九歳の第一句集。一九七〇年～七五年の二百六十句。「日時計」発表の作品と「俳句研究」五十句競作の作品が中心。但し、七四年の「日時計」第十三号（終刊号）から同年創刊の「黄金海岸」（翌年に四号で終刊）にかけて連載した「与野情話」は、翌七七年に第二句集『與野情話』（沖積舎）として別途に上梓。

『鳥子』に先行して、日時計俳句叢書第四卷『姉にアネモネ』（一九七三年、青銅社）があるが、これは製本されていない五十句の書き下しで、そこから抜粋（一部改変）した四十句が『鳥子』に再録されている。

\*

「おそらく、摂津幸彦は、まだ十分には喋り慣れたり書き慣れたりしていないのであろうが、その不慣れなもどかしさのようなものを、いち早く安直に抜け出してしまおうなどは少しも思わずに、新しく何かが見えてくれば、同時に何かが見えなくなるという面倒な道程を、辛抱づよく一歩一歩と歩んでいるのである。」

「それにしても、このような作品に現実に出会うまでは、これほど俳句的な俳句が、こんな非俳句的な環境と思われたところに存在し得るなどは、よもや誰も想像しなかったに違いない。／＼しかし、本当にすぐれた俳人は、ただ一人の例外もなく、そのときどきの俳句形式にとって予想外のところから、まさに新しく俳句を発見することによって、いつも突然に登場して来たのである。」

（高柳重信『鳥子』序）

■「俳句的」というパラダイムを離れて

「僕は一九七〇年に学校を卒業したわけですよ。あらゆるものにエネルギーがあったみたいなああの時代っていうのは、今までもこれからもないね。今から思えば非常に素人っぽいわけだけれど、暗黒舞踏とか、寺山修司の天井桟敷とか、唐十郎とか、あるいは映画もいろいろ、ヌーベルバーグですか、吉田喜重とか大島渚とか、そういう人が活躍していた時代で、(中略)そういうところから俳句をはじめたわけです。」

(一九九六年『恒信風』インタビュー)、『俳句幻景』所収)

「今、これらの作品を再び読み返してみても、この最短定型詩型なる俳句形式の中に塗り込められた数多くの言葉が、果して何を意味し、遂に何を意味しなかったのかに想いを馳せる時、言葉とほとんど同時に存在してしまう意味なるものに不快を覚えてしまうのはどういうわけであろう。」

(『鳥子』後記)

\*

攝津幸彦の俳句は、言葉の取合せである。物の取合せではない。したがって、いわゆる「二物衝撃」ではないし、一物仕立でもない。また、かつての「前衛俳句」のように、個々の言葉があらかじめ何かの比喩として使われることはない。取り合わされた言葉が、五七五という定型の語法によって〈俳句的喩〉を生む。

■『鳥子』の作品——五十句競作以前

「流体力学」「H&R」(一九七〇年、「日時計」第七号、他)

みだれ髪 寒満月の 後始末

人肌をむすぶめねじのかをるなり

花嫁のごとく渚に跨がるや

軍人をくはへし姉の霞むなり

亡母まだまひるの葱を刻むなり

「姉にあねもね」(『姉にアネモネ』より抜粋)

姉にあねもね 一行二句の毛は成りぬ

あぶら屋の三女の顔を濡らして婚

喉元を過ぎて四谷の椿かな

みづいろやつひに立たざる夢の肉

くじらじゃくなま温かき愛の際

■『鳥子』の作品——五十句競作以後

「頌歌」(一九七三年、第一回五十句競作・佳作第一席「亡父あるひは  
あひるの為の頌歌」)

鬼あざみ鬼のみ風に吹かれをり  
昼顔を洗ひなほしてをどこ発つ  
出る釘の頭に亡父を養へり  
永き日の蠅取り紙の上下かな  
舟燃えてあひるぐんぐん秋となる  
足洗ふ春野に銭を忘れけり  
南浦和のダリヤを仮のあはれとす  
曇天に紛れて針を買ひわする

「幻景」(一九七四年、「皇国前衛歌」および第二回五十句競作・佳作  
第一席「鳥子幻景」)

送る万歳死ぬる万歳夜も円舞曲ワルツ  
若ざくら濡れつつありぬ八紘あめのした  
満蒙や死とかけ解けぬ春の雪  
丈夫やマニラに遠き波枕ますしを

幾千代も散るは美し明日は三越  
皇国みくに花火の夜も英霊前を向き  
南国に死して御恩のみなみかぜ  
皇国こっくや左手ゆんでのごとく旗すすき  
はるばると死すチチハルに大夕陽  
蜿蜒と炎々と蟻只今旅順

「幸彦はこよなく軍歌を愛した。戦争を体験した大人たちが、その戦争を憎みながらも、軍歌というフィクションによってその体験を美化していく。幸彦はそこに、戦中派の男たちの哀しみを見たのである。とりわけ『父よあなたは強かった』は、カラオケで歌う幸彦の十八番だったが、軍歌はそのまま『父』という存在の哀しみでもある。幸彦が登場させる『亡父』とは、『兜も焦げる炎熱を敵の屍とともに寝て』戦った無数の『父』だといっている。」

(仁平勝「ビギニング・アンド・ジ・エンド」、『露地裏の散歩者』所収)

「逍遙」(一九七五年、第三回五十句競作・佳作第一席「鳥子逍遙」)

万卷の書は庫にあり鳥渡る

馬上より淋しく一人静かな

大辞典亡父は桜さくらかな

友の瞳に友映りゐて二階かな

昼顔やわが兄はまた舟に乗り

良夜のまだうらわかき艶かな

白地着て流るる頃を流れけり

蛍雪や近江の春を読み遺し

## □補説

「僕の場合、初学の時代、いちばんよく真似たのは赤尾兜子、

あと河原枇杷男ですね。真似るのをあきらめたのが加藤郁乎と

高柳重信。」(『恒信風』インタビュー)

赤尾兜子

鉄階にいる蜘蛛智慧をかがやかす

音楽漂う岸侵しゆく蛇の飢

広場に裂けた木塩のまわりに塩軋み

戦どこかに深夜水のむ嬰兒立つ

大雷雨鬱王と会うあさの夢

河原枇杷男

手にもてば手の蓮に來る夕かな

身の中の真つ暗がりの螢狩

外套やこころの鳥は撃たれしまま

薄氷笑ふに堪へて物は在り

秋かぜや耳を覆へば耳の声